photo: 江差の海にて（まほろば主人撮影）

泣いたとて
どうせ逝く人
やらねばならぬ
せめて波風
おだやかに

（江差追分・本唄）

8月31日、
青坂満大師匠の唄う「江差追分」の送り唄に送られて、ようやく米内功会長は、浄土に旅立たれた。
新参者の私に、ソイ掛けの手土産を遺してまで……。

どうしても、書けなかった。
米内さんが亡くなった事を……。
皆様にお知らせすることも出来なかった。
既に、亡きご両親の法事に、札幌の初代かもめ会会長のお祖父ちゃんと、お母さんの大好きな「江差追分」で供養しようと、青坂師匠との約束で、この日を待ちに待っていた。
だが自らが、三・七日（みなのか）のイノチとなって手向けられようとは……。

死してもなおも親思う、親孝行。

米内会長とは、思い出があり過ぎて、何処から書けばよいのやら……言葉が見つかりません。

奥様・三枝子さんのお許しを得て、葬儀の弔文を掲載させていただき、みなさまと共に、故人を偲びたいと存じます。

失礼があれば、どうぞお許しくださいませ。

弔辞

米内会長。
今、どうされていますか。
あれほど会いたくて会いたくて、
夢にまで見た恋しいお母さんと一緒ですか。
嬉しくて嬉しくて、
赤ん坊のようにお母さんに甘えて離れないでいるんでしょう。
瞼(まぶた)に浮かんで、見えるようです。
そこにお父さんは居ますか。
お父さんは、今もおっかないですか。
きっとやさしいお父さんに変わっていて、
三人で小躍りして抱き合っているのが見えます。
天国は、良(い)いところですね。

寂しくなんかないですね。
会長のこんな嬉しそうな顔、見たことありません。
こんなにもハシャイダ声を聴いたことがありません。
もうこの世のことは忘れるくらいです。

でも取り残された私たちは寂しいです。
市場に行っても四十三番は火の消えたようで、
もぬけの殻で、心の張りが抜けてしまいます。
市場通いの楽しみが消えてしまいました。
会長のあの元気な掛け声、冗談や怒鳴り声、
今となってはみな懐かしさで一杯です。
明るく何時も励ましてくれた何気ない言葉の
はしはしから、勇気をもらいました。
そして、何よりも青果業の同志として、先輩
として良き範を示してくれました。

八百屋の端くれの私も今年で三十年。
それは米内会長とのお付き合いの長さでもありました。
「有機の町」宮崎県綾町の大根を引いて下さることから始まり、
故・郷田実 前町長を訪ね、
山形は高畠町の農民詩人・星寛治さんを
一緒に訪問した思い出は、終生忘れません。
そこを種火として、会長は有機農産物を
市場に取り入れることに情熱のありったけを

米内さん さようなら

傾けました。
人に何と言われようが、思われようが、我が道を行く人でした。
そのような志がなければ、当時まだ安全意識の薄い北海道に有機のネットワークと、流通システムを確立することは困難でした。
時代に先駆けて、「環境保全」という大義に、熱き血潮を燃やし続けた生涯でした。
有機認証制度を逸早く取り入れ、市場内にコーナーを設け、生産者の育成や小売店に販路を広げ、今日一般的になった「安心安全」の標語を身を以て示されました。
全国に行くと『北海道に米内あり』とまで賞賛され、
五年前には道から『北海道産業貢献賞』を表彰されるまでの、その貢献度は計り知れないものがあったのです。

その信じたら動じない信念は、きっと幼年期に培われたのだと思います。
よく聴かされました。
満州からの引き上げで、筆舌に尽くし難い苦難の山々を超え、ロシア兵の壮絶たる追っ手から逃れ、一家手を取り合って、命からがら日本に帰って来た。
命の奥深くに刻まれた家族の絆、親の恩愛を誰よりも大切に、大切にされる方でした。
会長は父母の背中を見て受け継いだ情（じょう）の人、情（なさ）け深い人でした。
大陸への記憶が、会長をスケールの大きい心に育てたのでしょう。
とにかく旅行好きで、世界各国隈なく歩き回り、その楽しみ方は日本人離れをしていました。
見知らぬ外国人にもすぐ話しかけ、すぐ友達にしてしまう開放的な心は、まさに大陸的でした。
昨年は病身を押してペルーまで強行、そこで倒れましたが、また長旅を続けたのです。
それほど好きでした。
厳しいお父さんに隠れてサックスを吹いた札商高校時代。
辞めさせられるも、ついに生涯ジャズ好きは

青阪満師匠（右端）を囲んで（2013 年）

大貫妙子さんと（2013 年、芸森ハーベストにて）

米内さん さようなら

治りませんでした。
札幌市内の著名なアーティストはみなお友達で、私も仲間に加えて戴きました。
そして、市場の休みの合間に、仲間と行く海釣りは半端ではありませんでした。
疲れというものを知りません。
納屋の工具類はプロ並みで、車好きも嵩(こう)じて何台買い換えたことでしょう。
とにかく、人生を楽しみました。思いっきりエンジョイしました。
思うまま、赴くまま、人生を我が物としました。

病魔に襲われた十三年と半年間、体は患いましたが、
それにめげずに、己が思い通りに心で生き切りました。
それが出来たのは、奥様の三枝子さんがいらっしゃったからだと思います。
昭和十二年六月十五日、二人とも同年同月同日生まれの、まさに神様の申し子のように、双子のようにして、この世に生を受け、この世で結ばれたのです。

小泉武夫先生と（2013 年）

相思相愛のお二人は、人も羨むようなご夫婦仲でした。
奥様は、観音菩薩さまの生まれ変わりのように慈しみ深く、
わがままなご主人のどんなことも、何時でも笑って受け止めてくれました。
奥様の胸の中で、どれほど泣いて慰められたことでしょうか。
亡きお母様を実の母親のように慕ってくれました。
会長には二人の母親がいたのです。
だから、会長は自信を以て、人生を謳歌したのです。
そして、輝いていたのです。

会長は、何が残らなくても、奥様という大きな宝を遺して先に旅立たれました。
もし、思い残すことがあるとすれば、隣に三枝子さんが居られないことでしょう。
きっとあの世でも、奥様を待ち侘びていらっしゃることでしょう。
でも、まだまだ、我慢してくださいね。先は長いのです。

兄想いの健気(けなげ)な妹さまを始めご親族や、弟の哲ちゃんが、跡を継がれて、立派に『米内青果』を盛り立てて行くでしょう。
青果業の仲間や私達も応援しますから、安心してください。
きっと、理想の道が開けるでしょうから。
遺された私たちは、泣くことなく、笑って会長を見送りたいと思います。
『人生万歳！！』
と歓声と拍手を以て見送ります。
短くも長き七十七年を見事に生き切った会長、本当にお疲れ様でした。
これからは、天国でも思い切って楽しんでください。
私たちも、後から追っかけて行きます。
待っててください。

平成二十六年八月お盆の十四日の葬儀に
あなたの後輩　**宮下　周平**
茲に述べる